

雄鳥と小さな雌鳥の話をしてしよう。雄鳥は叔父の子供、つまり従姉妹と結婚したかった。小さな雌鳥の母親はこの結婚を望まなかったが、叔父の方は自分の子供と甥が結婚するのを見たかった。雄鳥は最後には小さな雌鳥と結婚した。この話は、彼が夫婦の住まいに迎えられた日に起こったことだ。

小さな雌鳥は若い新郎を呼んで言った：

「来てちょうだい。この家で暮らすにはあなたが知らなくちゃならない決まりがたくさんあるの。それでは、ここからは入っていいけれど、ここから入っちゃだめ。この部屋ではしゃべっていいけど、こういう時はしゃべってはいけないの…」等々。

彼女はこの家では先輩だから、彼にこの家でどういう風に暮らすのかを示そうとしていた。若い新郎が中で寝るために籠が作られていたが、雄鳥は断った：

「いやだ！ 僕は籠の中でなんか寝ない。僕が寝られる部屋を用意してくれ」。

小さな雌鳥は答えた：

「いいこと。私はあなたよりずっと前からこの家で暮らしているの。この籠の中で寝た方がいいわよ」。雄鳥は「僕は籠の中では寝ない」と断固として拒否した。彼は籠の上にのぼってそこで寝てしまった。

夜になり、雄鳥や雌鳥を食べる猫たちが現れ、彼らの食欲を満たすものがないか探しながら家の中に入ってきた。彼らは辺りをよく見回して、籠の上で寝ている雄鳥を見つけた。彼らは「エ・ダー」と上から飛びかかった。雄鳥は猫たちのたてる物音を聞いて、時の声を上げ始めた：

「ククークー！！ ククークー！！」

小さな雌鳥が答えた：

「まったくも一、正午に鳴くのが雄鳥で、夜に鳴くのは雄鳥じゃないわ。あなたには籠の中に寝に来るように言ったのにあなたは断った。それじゃ鳴くのをおやめなさい。あなたは本物の雄鳥じゃないわ」。

いずれにしても猫たちは怖くなって逃げ出し、雄鳥は食べられることはなかった。

夜は明けたが雄鳥は午後まで籠の上にあった。彼の叔父とその妻は疲れて、寝台の上で休もうとし始めた。雄鳥は彼らを通るのを見て、彼らの寝台の上のぼり鳴き始めた：

「ククークー！！ ククークー！！」

小さな雌鳥の母親はびっくりして飛び上がった。彼女は雄鳥を罵るのをこらえて祈り始めた：

「神が、お前をこの家に迎えた者に罰を下されますように。過ちを犯したのは、お前をここに連れてきた者で、夜に鳴くお前じゃない！」

こう言いながら彼女は、雄鳥と小さな雌鳥の結婚を許した叔父を非難したのだ。彼女は反対していたのに。